「心に残った私の余暇経験―オンリーワンのエッセイ―」　選出6本!!

「裏切られた成人式」

大学２年の秋に同窓会の案内状が送られてきた。行く気はなかった。なぜなら、地元の同級生が好きではないからだ。小学生、中学生の頃一緒に過ごした同級生に抱いていた感情は少しも良いものではなかった。特に同級生の男子に対して私が思っていたことは、表現が適切ではないかもしれないが、「ガキ」の一言に尽きる。授業中はうるさい、問題を起こしてばかり、学年の成績上位層は常に女子。中学時代の私は「早く卒業して女子高に行きたい。こんなガキな男子達とは早く離れたい。」とばかり願っていた。そんな願いがかない、私は女子高へ行き、大学へ進学し、地元の同級生とは無縁な生活を送ることができた。同窓会へ行く気はなかったが、お世話になった先生方には挨拶したいという思いはあった。「同級生に会わなくてはならないのか。」という感情はあったが、私は同窓会へ出席することにした。

成人式当日、会場に到着した私は驚いた。あんなにやんちゃだった男子達が真面目になっているではないか。同じ中学校出身ではない人達は派手な袴を着て、式中もうるさかったのだが、私と同じ中学校の男子は全員立派なスーツに身を包み、式中の態度もすばらしかったのである。さらに驚いたことに、成人式で市内の成人代表として挨拶したのが、私の近所に住むガキだなぁと思っていた男子なのだ。素晴らしい挨拶で、あんなにガキだった彼はいつの間にこんなに立派な大人になったのだろうと私は感動してしまった。

成人式が終わり、同窓会に移っても私の驚きは続くことになる。私は中学生時代、男子を避けていたこともあり、男子に話しかけられることは無かったのだが同窓会の会場では男子達が意外にも気さくに話しかけてくるではないか。現在何をしているのか話してみると、地元に残って働く者、将来の夢に向かって勉強中の者、皆非常に立派になっており、うわついている者は本当に一人もいなかった。そんな中、非常に目立っている男子が会場にいた。ファッショナブルなスーツに身を包む彼は昔とてもやんちゃで、いわゆる問題児であった。最初は自分から話しかけに行く勇気が出なかったのだが、周りの男子達の気さくさのおかげで話しかけに行く勇気が徐々に出てきて、私は自分からその男子に話しかけに行ったのだ。彼は以前とは違いとても落ち着いたしゃべりだった。そして私は彼から「昔、先生にすごく迷惑をかけたしお世話になった。ものすごく感謝をしている。だから今度は自分が先生になって、俺みたいな生徒の面倒を見たいんだ。」と聞かされた。現在彼は教員免許取得のため大学に通っている。私はこんな言葉を彼から聞けてすごく感心したと同時に、同窓会に来て心の底から良かったと思えた。中学校の卒業式の日に先生方が「君たちと成人式の日に会えることを楽しみにしている。」と言った本当の意味が、成人式当日に理解できた気がする。成人式に「ガキ」は一人としていなかった。

今まで地元の同級生と余暇を過ごしたいなんて思ったことは無かったが、成人式をきっかけに私の考えは変わった。期待していなかった成人式に私は良い意味で裏切られたのである。驚かされてばかりの成人式だったが、私が皆を驚かせたこともある。それは、私とファッショナブルなスーツの彼が成人式をきっかけに恋人関係になったということだ。

「心に残った私の余暇経験―オンリーワンのエッセイ―」　選出6本!!

暑さを忘れて熱く観戦

この時期(7月現在)やけに落ち着かない。遠足や修学旅行等の行事の前夜は眠れないという感覚にとても似ている。わくわくでたまらない。各地方の組み合わせ抽選が徐々に決まっている。夏の訪れを感じる時期が今年も近づいている。

2006年夏、現日ハムの斎藤佑樹擁する早稲田実業(西東京代表)と現ニューヨークヤンキースの田中将大擁する駒大苫小牧(南北海道代表)の決勝戦をテレビの前で見ていた私は、この時期から高校野球に魅了されていってしまった。いや、取り憑かれたと言ってもいいかもしれない。ご存知の方はいるかと思うが、『甲子園への道』や『熱闘甲子園』という高校野球特集番組を毎日録画しては繰り返して視聴するという、言わば高校野球観戦オタクになっていったのだ。

一応私も元高校球児という身である。高校時代に捧げた時間は、勉強よりも野球に打ち込んだ時間のほうが圧倒的に多い。しかし高校球児になっても、私の高校野球はやるほうより見るほうにベクトルを向いていたのかもしれない。観戦しすぎて母校の校歌よりも2010年に春夏連覇を成し遂げた興南高校などの強豪校の校歌を先に覚えて、監督に怒られたことは恥ずかしい思い出だ。それでも上手い球児のプレイを見ているおかげか、それらを真似したいと思っていて頑張っていたら私自身も技術が身についたことは確かであった。

大学生になった今では、時間があれば高校野球を観戦するようにしている。観戦の仕方は、テレビでの視聴と球場に直接観戦する二種類があるが、テレビで観戦するのと生で観戦するのでは全く違う。今在住する栃木県では、栃木テレビが一回戦から高校野球を放送しているが、私は見たことがない。それは必ず球場まで足を運んで生で見ることにこだわっているからだ。片道20分から30分、炎天下で自転車を走らせてまでも生の観戦にこだわるのは、現場の雰囲気(歓声や両校の応援等)を体感できるからだ。また人見知りの私でも、高校野球をテーマにした話なら、故郷、年代が異なっても、プレイボールからゲームセットまで周りの観客とネタが切れることなく話をすることができる。実際話しが盛り上がりすぎて60代以上の日焼けしたおじさんから缶ビールをもらい、杯を交わしたこともあった。

甲子園にも何度か足を運んだことがある。この春の選抜には、準決勝、決勝と二日続けて甲子園で試合を見ることができた。地方球場とはまた違った迫力、臨場感を味わうことができる。無料で開放されるお得な外野席、地元に里帰りしたかと錯覚を受けるアルプススタンド、プレイヤーにかなり近づき見ることができる内野席、そして今回の決勝戦は、念願だった中央特別自由席にとるために、朝から約5時間待って座ることができた。プレイヤーの表情がはっきりと映り、更には真正面から一球一球、高校野球を堪能することができた。野球のわからない彼女にルールを教えながら、ほろ酔い状態で友人とひとつひとつのプレイに意見を交わしてみた大甲子園での決勝戦はかなり格別だった。

今年もまた球児にとって最後の夏がやってくる。一年中高校野球から目が離せない私も、この時期は特に注目している。私もできる限り時間を見つけその闘いをしかと目に焼きつけるとしよう。熱中症にはかなり気をつけなければならない時期だが、今年もまたほろ酔い状態で隣のオヤジや友人と観戦に熱中しながら議論を交わし、日焼けをしながら「避暑」でもしようかな。

「心に残った私の余暇経験―オンリーワンのエッセイ―」　選出6本!!

「当たり前」を失って、初めて気付いた私の余暇

私の趣味は、音楽である。私は、母が音楽好きであったため、自分の意思とは関係なく、４歳の時からピアノを習い、物心がついた頃には、音楽がある生活が当たり前になっていた。小学校までは、ピアノ演奏や作曲など独奏が得意だったので、その頃の私にとって音楽は「個人」としての音楽であった。

しかし、中学生からの部活動をきっかけに、私の音楽の捉え方に変化があった。中学校で吹奏楽部に入り、その新しい音楽形態に魅せられた私は、高校 3 年生までの６年間、サックス演奏の練習にも力を入れることになった。特に、高校の志望動機は、吹奏楽部の強豪校であることを理由に選ぶほどであった。無事に受験を終えて入った私の高校の吹奏楽部は、夏のコンクールや冬のアンサンブルコンテストで、東北大会に出場するなど、高い実績を残しており、部訓「一音入魂」のもと、毎年 100 名近く集る部員が日々練習に励んでいた。練習は、毎日長時間に渡って行われ、体力的にも厳しいものであったが、この頃の私にとっての音楽の捉え方は「集団」としての音楽に変化し、部員 100 名が心を一つにし、一つの曲を完成させるという感動が練習の活力となっていた。

しかし、そんな当たり前の毎日の部活動が、当たり前でなくなる事態が起こった。それは、2011 年に起きた東日本大震災である。私は宮城県出身のため、学校や自宅は大きな被害を受け、震災後のしばらくの間は、部員の日課であった部活動ができなくなってしまった。この時、私は初めて自分の音楽活動が「余暇」の時間であったことを意識することになった。思えば、今まで私が置かれている環境は、とても幸せな環境であった。当たり前のように学校に通い、勉強し、部活動では好きな音楽をやることができていた。確かに、練習がハードだと、自発的にやっていたはずの部活動が、義務のように感じることもあった。しかし、震災を通じて、私が当たり前のように毎日取り組んでいた部活動は特別な時間であり、よくよく考えれば、世界中には貧困や戦争などで余暇の時間を持つ余裕すらない人々がたくさんいることにも気付かされた。

部活動が再開してからは、部員の強い思いで「音楽で笑顔と元気を届けよう」というテーマに基づいたチャリティーコンサートを行い、全日本吹奏楽界連盟を通じて被災地に寄付させていただいた。またこの時、寄付金だけではなく、多くの方から感謝の言葉もいただいた。私は今まで、音楽を自分のためにやることが多かった。幼いころから習ったピアノでも結果が求められたし、高校の吹奏楽部にも実績を求めて入部した。しかし、このようなチャリティーコンサートを通じて、自分の奏でる音楽を喜んでくれる人の存在に初めて気付いた。私は、今自分が置かれている環境に感謝することの大切さや、アマチュアでも人の心に響く音楽がつくれたり、人の役に立つことができることを実感した。

以上のことから、私は、音楽は余暇の時間であると認識するとともに、また、余暇とは、当たり前と思われがちだが、実は特別な時間であり、その特別な時間や空間は、人との繋がりによって成る立つものだと考えることができた。

「心に残った私の余暇経験―オンリーワンのエッセイ―」　選出6本!!

母と過ごした小さな余暇

私は今年の４月に宇都宮大学の３年次に編入学した。周りの友人たちはそれぞれ一人暮らしをしているけれど、私は東京にある自宅から毎日約２時間半かけて通学している。そのため、朝早くに起床し、遅くに帰宅する生活をしているので、家に帰ってからの時間をゆっくり落ち着いて過ごすことが今までより少なくなった。自分で決めたこととは言え、東京と栃木の往復で一日が終わることがほとんどで体の疲れが取れずにいたし、初めての土地での勉強や対人関係など、新しい環境に馴染めず、心も疲れ、気持ちに余裕がなくなっていた。

入学して１ヶ月ほど経った５月の中ごろに、おそらく疲労がたまり始めた私を見かねて、母がたまにはゆっくり登校しようと、２人で宇都宮に向かう新幹線の最寄り駅である大宮のホテルに一泊することを提案してくれた。観光地に遊びに行くわけでもないのにすごくワクワクした。私以上に仕事や家事で忙しいはずの母の気遣いに感謝している。

蒸し暑い中だったけれど、ゆっくり歩いたホテルまでの道。到着したそこは、もちろんリゾートホテルではなく、サラリーマンが多く宿泊している一般的なビジネスホテルだった。しかし、東京と栃木を往復する生活になってから平日の夜にまったりする時間がなかなか取れなかった私にとっては、そこはリゾートホテルか、それ以上に魅力的に感じられた。ルンルン気分で選んだアメニティ。入浴剤や髪留めなど、２人合わせて１０個選んで部屋に向かった。部屋に着いてから真っ先に寝転んだ広いベッド。暑い外を歩いた後のひんやりしたベッドが気持ちよくてしばらく２人でゴロゴロしていた。母と二人で見たテレビ番組。ちょうど旅番組が放送されていたけど、その時の私には自分が泊まったホテルの方が何倍も魅力的に見えた。のんびり食べた夜ご飯。母の手料理じゃなかったのは残念だったけれど。広い浴場で入った熱めのお風呂。ほとんど貸し切り状態でついついのんびり浸かってしまった。横になったベッドで母と交わした会話。取り留めのない話をしていたら、いつの間にか眠っていた。陽の光を感じながら食べた朝ご飯。ラウンジでバイキング形式の温かいご飯を食べた。決して広いとは言えない部屋だったし、何か特別なことをしたわけではないけど母娘水入らずで過ごした時間は、私にとってはすごく特別で、充実したものになった。

今回の経験から、遠出や旅行などの大きなものだけが余暇ではないと感じた。また「余暇」は、「余」った「暇」と書くけれど、この余った暇な時間こそが活力の源になっていて普段の生活を充実させるためにとても大切だということ、そして、ごく普通で当たり前なことが、実は特別なのかもしれないということを感じた。まだ、いっぱいいっぱいな大学生活だけど、今回のような小さな余暇で気分をリフレッシュさせながら楽しく過ごしていきたい。

次の日の朝、学校に向かう足取りは、いつもと違って軽やかな気がした。

「心に残った私の余暇経験―オンリーワンのエッセイ―」　選出6本!!

４年ぶりの帰省

「もうしばらくは戻ってこないから。じゃあな。」恰好つけてそう吐き捨てて家を飛び出してから実に４年という月日が流れようとしていた。二十歳になったその年、私はある決断をした。実家に帰ろう。

私は両親の都合でドイツに生まれ育った。平日は現地の学校に通いつつ、週末は日本人の補習校にも通っていた。ドイツに長く在住していたにも関わらず私はドイツの社会に全然馴染めずにいた。人種が違うことからいじめにも遭った。私はいつしかドイツが嫌いになり、日本に住むことに憧れていた。ネットで日本のアニメ等の動画を見漁っては、日本の青春高校生活を夢見ていた。そしてドイツの中学を卒業した年、私はついに夢見る日本へと家族を置いて一人旅立った。しかし、親の反対を押しのけてまで夢見た青春はあくまでもテレビの中にしか存在しなかった。急激な環境の変化についていけなかった。それでも意地でも故郷に帰りたくなかった私は再び異文化という巨大な壁に立ち向かった。ドイツで味わったいじめに比べるとなんてことはなかった。作法も言葉も違うこの地に慣れるまでそう時間はかからなかった。そうしてダラダラと時も過ぎ、二十歳の誕生日を迎えた。そして二十歳になってから、自分にまったく新しい感情が芽生えた。今まで毛嫌いしていた故郷に今帰ればなにか変われるのではないか。直感的にそう感じた。なにかが私を突き動かした。そうして私は４年ぶりに実家に帰ることにした。

久しぶりの故郷はなにひとつ変わっていなかった。周りの田んぼも緑も錆びついたバス停も全部そのままだった。久しぶりに見る部屋はいつもより狭く感じた。電気のスイッチも椅子の高さも低く感じた。それが４年間の空白の時間を実感させた。

珍しく家族全員がそろったということで数年ぶりに家族旅行をした。昔から決まって旅行といえば遊園地。ヨーロッパの他の国に行くのにあまり時間も費用もかからないというのに毎回決まって遊園地。家族そろって絶叫好きなのである。今回行ったのはヨーロッパの中でも最大級の遊園地。日本と違うのは待ち時間がぜんぜんないこと。規模がでかいこともあってこの日は一日中歩いて疲れたが久しぶりの家族旅行はいい息抜きになった。
他にもドイツに留学に行っている友達と一緒にドイツのビール祭りに参加した。祭りとはいえど、やることはただ周りの人と一緒に１ℓのジョッキでビールを飲むだけ。これが本当にドイツ最大の祭りなのかと疑ってしまいたくなるぐらいだった。しかし、いろんな国から来た人と交わす杯は最高で人種、国籍関係なく言葉が通じずとも一体となっていたあの感覚は今でも忘れられない。２週間の滞在であったにも関わらず、イベントはこの２つぐらいだった。そのほかの日はたまに父親とテニスするぐらいで、あとは実家でなにかすることもなくただダラダラと過ごしていた。

あんなにも毛嫌いしていたはずなのに、不思議と気持ちは癒されていた。今では故郷に対して抱く想いも変わった。今までのどんな活動よりも心が安らいだ気がした。これからは明るい気持ちで帰省できるに違いない。そう思うと故郷を離れるのが急に寂しく感じた。少しだけ自分が大人になった気がした。

「心に残った私の余暇経験―オンリーワンのエッセイ―」　選出6本!!

二度と行かない「さくらまつり」が見せてくれたもの

それは、春休みの終わりを告げる学部オリエンテーションの前日のことだった。大学に入ってから地元を離れて一人暮らしをしていた私は、入学後初めての春休みが終わるギリギリまで寂しさから実家に帰省していた。そしてその日の午後、私は宇都宮に帰る予定でいた。

その時期はちょうど地元の桜祭が開催される時期で、偶然にもその日は隣駅で小規模な「さくらまつり」、翌日のオリエンテーションがある日にはもう一方の隣駅で比較的大規模な「さくら祭り」が催されることになっていた。ちょうどお祭りがあり、私も宇都宮に戻るので、珍しく家族三人で午前中に祭へ出かけようという話になった。私は、次に両親に会えるのがずっと先の夏休みだということを寂しく思っていたので、オリエンテーション当日に宇都宮に戻るという予定に変更してでも馴染みのある規模の大きい「さくら祭り」に行きたいと感じていた。しかし母からオリエンテーションに遅れてはいけないと諭され、渋々馴染みのない「さくらまつり」に行くことになった。隣駅までは徒歩で三十分もかからないほどなので三人で歩いたが、しばらく地元を離れていた私ではなく父のほうが道を忘れてしまっていて、いつの間にか老化した父に少しの不安を抱いた。

「さくらまつり」にはそれまで参加したことがなかったが、ファーストフード店の裏の駐車場を貸し切っただけという予想を上回る小規模ぶりだった。個人によるフリーマーケットや出店が片手の指で余る程度、屋台も二、三店。おまけに肝心の桜は付近にあまり植えられておらず、しかも少し散ってしまっていた。見たいものも買いたいものも特になく、正直なところ期待外れだった。すぐにやることがなくなった私たちは、少しの間、お祭り会場の目の前にあるショッピングモールをうろうろしていた。

途中、父がお手洗いに行っている間に、私は以前から疑問に思っていたことを母に投げかけてみた。「私がいないときもお父さんとお出かけしたりするの？」。私が実家にいるころには母ともろくに喋らなかった無口で照れ屋な父が、陽気でおしゃべりな母と二人きりでどう過ごしているのか、私には想像がつかなかった。もしかしたら、案外私がいない方が父は照れずに母といられるのかもしれない、と私は以前から感じていたのだ。私がメールを送っても返信をしてくれないことすらある父と、逆に頻繁に手紙を送ってくる母の関係を心配することもあったが、二人きりでもうまくやっているのなら安心して次の夏休みまで宇都宮にいられる、という期待もあった。母は、「まさか。あなたがいないと一緒に出かけようなんて話にならないわ」と笑って答えた。その表情を見て私は、二人はきっと仲良くやっているのだな、と確信した。

「さくらまつり」には、もう二度と行かない。しかし、「さくらまつり」に家族全員で行ったことで、実家を出ていて気づくことのできなかった「親が歳をとったこと」や「夫婦仲が意外にうまくいっていること」を知ることができた。私はこの一日で、時はたしかに流れ、人は変化しているということを漠然と感じ、しかし確実に学んだ気がした。そういう意味で、「さくらまつり」は私の記憶に残る余暇体験だった。